「揺さぶる絵」展と田中武氏の作品《裏側（十六恥漢図シリーズ）》について

8 月 27 日の当館の X（旧ツイッター）における田中武氏作品《裏側（十六恥漢図シリーズ）》の紹介に関して、様々なご意見をいただきましたことから、改めて同作を含む特別展「揺さぶる絵―変貌する日本画のイメージ」の企画趣旨と、同作品展示の意図についてご説明申し上げます。

同展は、戦後、社会や価値観の変革の波にさらされながら、日本画家たちがリアルで強靭さをそなえた表現を求めて主題や描法などの幅を広げ、既成の日本画の枠組を揺さぶっていく様を展観する企画です。

全体を 5 章立てとし、1～3章では表現探究の方向性から「生を見つめて」「素材と表現の探究」「自然との孤高の対話」に分けて作品を紹介し、「4 章 反骨の画家―中村正義と片岡球子」では個性的作風によって表現の枠を大胆に押し広げた二作家の作品を特集展示します。そして 1980 年代後半に美術史研究において、明治初期の「日本画」の成り立ちや概念が精緻に検証され、明確な定義が無いことが明らかとなった後、20 世紀末以降に描かれた作品を「5 章 逸脱する日本画」で展覧します。作家たちは日本画の枠組から解かれ、現代美術や古典絵画の表現なども自由に結び合わせながら、それぞれが見いだした絵画世界を多彩に展開しています。

田中武氏の《裏側（十六恥漢図シリーズ）》はそうした現代作品の一点として紹介するものです。このシリーズは（本展では 1 点のみ出品）、仏教絵画の《十六羅漢図》から着想され、釈迦の高弟で煩悩を断ち切り悟りをひらいた十六羅漢とは真逆の、様々な欲望を抱きながら生きる現代人の群像を描くというコンセプトで制作されました。その二作目にあたる《裏側》は、作者によると「物事の裏側」をテーマにした作品です。目の前に見えているものの裏側を知りたいという欲望を、フェイスパックを剥がして素顔を半分ほどのぞかせる女性像によって表現しています。これは《木造宝誌立像》（平安時代、京都・西往寺蔵、重文）や狩野一信の《五百羅漢図》（江戸時代、増上寺蔵）などに見られる、顔の下から別の顔が現れるイメージに触発された表現です。狩野重賢の『草木写生』（江戸時代、国立国会図書館蔵）に倣った花鳥画風の背景など、古典的な要素と現代的なイメージの衝突により、見る者に違和感とともに鮮烈な印象を与える独自の表現をみせています。

作者はまた、自己の経験に基づいて、現代人のもつ多様な欲望を、生の原動力という重要な一面があるものと肯定的にとらえ、それを自らの家族や友人などをモデルにした群像で表しています。自然の新たなとらえ方や伝統画材の特質を活かした造形表現など、多彩な視点で探求される現代作品のなかで、本作はとりわけ現代社会とそこに生きる人の心性を鋭く描きだした作品として、最終章で紹介するものです。

是非、「揺さぶる絵―変貌する日本画のイメージ」」展にお越しいただき、独自の表現を真摯に探求した作家たちの作品約 40 点をご覧いただければ幸いです。